

英文法準教科書・参考書をよりよいものにするために (2)

—例文を工夫する—

萩原 一郎

1. はじめに ～例文はなぜ1文なのか

なぜ英文法準教科書や参考書の例文はほとんど1文なのであろうか。スペースが限られている、1文でも生徒は大変なのに、2文以上にしたら手に負えない、授業をスムーズに進められる、生徒の暗唱用に便利、などが主な理由であらうか。しかし、この1文の例文が生徒の理解を妨げる原因になってしまうことがある。

以下の例文を見てみよう。ある「英文法準教科書」に載っている例文である。

- ・ I have already finished the book.
(私はすでにその本を読み終えた)
- ・ He should be home by now.
(彼は今ごろは家にいるはずだ)
- ・ That is why I don't like him.
(そういうわけで私は彼のことが好きではないのです)

2. 例文を2文にする

上にあげた最初の例文を見てみよう。この英文を過去形と対比して、現在完了形では「現在」に視点があると力説することも結構だが、現在完了形は「過去のことを現在に結びつける言い方」なのだから、もう1文「現在」を表す英文をつなげて、英文のつながり(「過去+現在」→「現在」)という観点を示しておく、ライティングの指導にもつなげることができる。

I've already finished the book. You can borrow it, if you like. (その本はもう読んだから、よかったら貸してあげるよ)

【従来の指導法】→現在完了形と過去形の対比

- ・ I have already finished the book.
- ・ I finished the book.

↓

【2文で提示】→「過去」と「現在」のつながりがスムーズになる

I've already finished the book. You
「過去」+「現在」
can borrow it, if you like.
「現在」

次に2番目の英文であるが、話し手の推量を表す助動詞 *should* が使われている。「～のはずだ」と話し手が判断するには、その根拠を必ず示さなくてはいけない。これは、*may*, *must*, *cannot* などについても同じである。その根拠を示す英文を加えてみると、

Nick left here half an hour ago. He should be home by now.

(ニックはここを30分前に出たのだから、今ごろは家にいるはずだ)

と当然2文になる。

もう1つ、最後の例を見てみよう。That is why... は関係副詞 *why* の「先行詞の意味を含む場合」と紹介されるが、That is why... はその前に「原因・理由」を表す文がきて、その後に「結果」を表す文が続くというのが一番大切なことである。

(原因を表す英文). That is why (結果を表す英文).

これを文法形式に焦点をあてて、1文で提示してもほとんど意味はない。上の英文を改善してみると、以下のようなになる。

He sometimes lies to me. That is why I don't like him.

(彼は嘘をつくことがときどきある。そういうわけで私は彼のことが好きではないのです)

以下、本稿では英文法準教科書や参考書(以下、「準教科書」)の例文を2文にしたほうがよい場合を具体例を通して考察する。なお、本稿でいう2文とは1文で重文、複文の場合も含んでいる。

3. どのようなときに例文を2文にすべきか

(1) 2文にすることで状況がよく見える

まず、2文にすることで例文が話されたり、書かれたりした状況がよくわかる、つまり2文を提示することで生徒の理解を助ける場合がある。そのような場合はぜひ例文を2文で提示したい。

簡単な例をあげれば、現在進行形の例文をあげる際に

I'm reading a book.

という何の変哲もない例文をあげるよりは、

“What are you doing?” “I'm reading a book.”
という対話形式の例文のほうがいくぶんよいが、

Shhh! Be quiet, please. I'm reading a book.
という話されている状況が明確にわかる例文のほうが望ましいということである。

また、第5文型を学習する際、次のような例文があげられることが多い。

We made him captain of our team.

we, himといった代名詞を使っていることもこの例文をわかりにくくしているが、1文だけで例文を示していることで、高校生にとっては状況がわかりにくくなっている。例えば、これを

The manager made John captain of our team because he is a good leader.

としただけで生徒にはイメージがわかりやすいはずである。これを例にして、第5文型の代表的な英文を状況がわかりやすくなるように改変してみよう。

・ Her friends call her Beth.

→ Her name is Elizabeth, but her friends call her Beth.

・ Leave me alone.

→ I want to be alone. Leave me alone, will you?

・ Please keep it secret.

→ This is just between you and me. Please keep it secret.

・ You'll find the book interesting.

→ If you read this book, you'll find it interesting.

別の例を見てみよう。ある「準教科書」では、have been to～には「～へ行ったことがある」(経験)と「～へ行って来たところだ」(完了)の2つの意味があるとし、以下のような例文をあげている。

・ He has been to Okinawa *three times*.

・ I have *just* been to the bank.

そして、「どちらの意味になるかは、文中の副詞句や前後関係から判断する」として、次にhave gone to～の意味を説明している。この前後関係を(ここではhave been to～とhave gone to～の対比であるが) *English Grammar in Use* は2文で明確に提示している。「前後関係」を別の1文で示し、have been to～の例文では「副詞句」のjustが使われていないことに注目していただきたい。

・ Jim is away on holiday. He has gone to Spain.

・ Jane is back home from holiday now. She has been to Italy.

概して、「準教科書」の例文はどれも同じようなものが多く、代名詞を多用することもあり、その状況がわかりにくいものが多い。現在では、*English Grammar in Use* などすぐれた文法書がたくさん出版されているのでそれらを参考にしながら、状況が明確な例文を高校生に提示したい。この点は「準教科書」の全ての項目に言えることであって、例文の大々的な見直しが必要になる。

(2) 日本語の説明を例文に織り込む

文法の発展的な学習に多く見られることだが、2つの似た意味を表す表現のもつニュアンスの違いを対比しながら日本語で説明することがある。例えば、ある「準教科書」では、mustとhave toの違いをmustは話し手自身が「～しなければならない」と思っていることを表す。have toは外部の事情などから「～せざるをえない」ということを表す、としてYou must study hard. / You have to study hard. といったような例文をあげているが、この二

ニュアンスの違いを例文を2文にすることによって学習者にとらえさせることが重要である。日本語の説明の中身を例文の中に織り込んでみたのが次の英文である。

- ・ I **must** stop smoking. I don't want to be in the hospital again.
- ・ The next class is PE. I **have to** change my clothes.

上の例文で自らタバコをやめなくてはいけないという気持ち、下の例文では体育の授業という外的な条件で着替えなくてはいけないという気持ちをつかませることができるだろう。

以下、同様の例を助動詞を使った例文でいくつかあげてみる。

- ・ I **used to** go to school by train, but now I usually walk. (used to...は現在との対比を表す)
- ・ I have a free ticket for a concert. I'm not so interested in it, but I **might as well** go. (他にすることがないから行くというニュアンスを示す)
- ・ You **had better** drop the gun, or I'll shoot you. (場合によって「脅迫」の意味を表すという点を例文で示す)
- ・ I pushed again and again, but the door **would not** open. (「どうしても～しなかった」というニュアンスを表す)

1文の例文について、教室で教師が理屈を日本語でこねるより、日本語の説明は最低限にし、生徒にそのニュアンスがわかる例文に数多く触れさせ、実際に英語を使う練習時間を確保したい。

(3) 情報構造への配慮

高校の英文法では、文単位の文法を超えた「談話文法」の成果がまだほとんど取り入れられていない。「談話文法」の要素を取り入れられるのは、「第4文型」「受動態」「従属接続詞」「倒置」「無生物主語」など数が限られているが、特に「受動態」「倒置」などの項目では「英文のつながり」という観点でぜひ、例文を2文で提示したい。

例えば、「受動態」では依然として能動態との書き換えが主流になっているが、これでは「能動態=受動態」という図式が生徒の頭の中にできあがってし

まうのも無理はない。複雑な受動態の英文を能動態に書き換えて高校生がその構造を理解しやすくすることは構わないが、どういうときに「受動態」を使うのか、例えば英語の Paragraph を書くときに、能動態・受動態のどちらを使うか判断できるきっかけを与えておきたいのである(これは英語 I・II, リーディングなどの授業でも指導すべきことであるが、えてしてこちら書き換えになってしまうことが多い。定期試験の「総合問題」を見ているとそのような問題がよく見られる)。「準教科書」で Paragraph を提示するのはスペース的にも無理があるので、最低限2文で英文のつながりを見せる必要がある。

「談話文法」では、英語の話し手・書き手は聞き手・読み手がわかりやすいように、すでにわかっている情報(旧情報)を先に、まだ知らない情報(新情報)を後にもってくるのが原則である、とする。従って、次の2つの英文のうち、第1文で出てきた this picture (=It) を主語にするほうが特に書きことばでは自然である。

- ・ Look at this picture. It was painted by van Gogh. (○) 旧情報
新情報
- ・ Look at this picture. Van Gogh painted it. (△) 新情報
旧情報

このことに関して、*Intermediate Grammar* では次のような Exercise が見られる。この種の練習問題を「準教科書」で取り入れていくことが必要である。

Work on your own. Underline the active or passive sentence that best completes each passage.

Remember that old information is usually found in subject position.

1. Charlotte opened the door
 - (a) and (she) was greeted by a strange dog.
 - (b) and a strange dog greeted her.
- 2: When we lived in that house,
 - (a) a garden was never planted by us.
 - (b) we never planted a garden.

また、「倒置」は高校生にとってなかなか理解しにくい文法項目であるが、私はその原因が「準教科書」と教師の教え方が原因であると思っている。「準教科

書」には「強調のための倒置」という言い方がよく見られるが、生徒には何を強調しているのかわかりにくく、煙にまいたような説明である。やはり、ここでも談話文法の考え方を導入して、英文は「旧情報+新情報」という語順になることを示し、倒置が使われる必然性を理解させる必要がある。

・ I found a small box on the table. In the box were some coins. (○)

旧情報

新情報

・ I found a small box on the table. Some coins were in the box. (△)

新情報

旧情報

なお、生徒に説明するときには、旧情報・新情報などの用語は使わずに、日本語で「テーブルの上に小さな箱を見つけた。硬貨が何枚か箱に入っていた」とするよりも、「テーブルの上に小さな箱を見つけた。箱の中にあったのは…」と続けたほうが臨場感があるし、読者の注意を引きつけられる、英語の場合も日本語と同じなのだ、と言うようにすると理解してもらえる。

「倒置」で思い出すのは、ある英語 I の教科書の編集に携わっていたときのことである。ある物語のネイティブ・チェックをお願いしていたとき、アメリカ人の K さんは

One evening I looked down upon a small yard. A hen sat with eleven chicks in the yard.

という英文を

One evening I looked down upon a small yard. In the yard sat a hen with eleven chicks.

と訂正した。そこに居合わせた編集委員はこれでは倒置の文になり、高校 1 年生には難しいので、元の英文ではダメかと食い下がったが、きっぱりと拒否された。結局、倒置の英文にして、脚注で倒置ではない英文を示したのだが、当時私にはなぜ K さんがそのように訂正したかわからなかった。「談話文法」を知るようになって、その理由がわかったのはかなり後になってからのことである。

つまり、

One evening I looked down upon a small yard. In the yard sat a hen with eleven chicks.

旧情報

新情報

という情報構造が優先して、「倒置」の形を要求するのである。

無生物主語も「準教科書」では英語の特徴的な構文として 1 文単位でしか取り上げられないが、情報構造という理由でもその形をとることが多い。1 つ例をあげておく。

I got an airmail from John yesterday.

His letter says that he will come back to

旧情報

新情報

Japan next month.

無生物主語と情報構造の関連については、『英語の文章の仕組み』に詳しい。

4. おわりに

高校生用の『準教科書』は新刊が出て、以前のものを焼き直した感じのものが多い。最近では特にイギリスの出版社からよい例文の詰まった、すぐれた英文法書がたくさん出版されている(しかも、その日本語版まで出ている)ので、それらを参考にして日本の高校生にとってわかりやすい例文が豊富に含まれた新機軸の『準教科書』が早急に出版されることを望みたい。そうした『準教科書』が定番になれば、英文法教育もかなり変わってくるはずである。

参考文献

Chart Institute (2004) 『Follow Up 英文法標準ドリル』数研出版。(私が前半部を執筆。本稿の内容をかなり取り入れている)

Raymond Murphy (2004) *English Grammar in Use*. Cambridge University Press.

Susan Kesner Bland (1996) *Intermediate Grammar—From Form to Meaning and Use*. Oxford University Press.

村上英二 (1998) 『英語の文章の仕組み—しっかりした英語を書くために—』鷹書房弓プレス。

池上嘉彦 (1991) 『〈英文法〉を考える』筑摩書房。

(神奈川県立白山高等学校教諭)